影ふたつ

一寸木　一二三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
影ふたつ

【Ｎコード】
Ｎ９９１５Ａ

【作者名】
一寸木　一二三

【あらすじ】
散歩をしていた少年が出会った不思議な出来事。首が取れる人と、無邪気な少年と、あめ玉のほんわかと不気味な話。

（前書き）

知らない人から物をもらってはいけません。

十二月　二日（水）今日、雪のふる町を散歩していたら、前を歩いていた男の人の首がとれた。　僕はおどろいて立ちすくんだ。人間の首がそんなに簡単にとれるなんて、想像もしていなかった。ただのっかっていただけの様に転げ落ちたその人の顔は、まだ若い人のようだった。首から下が頭をさがしてうろついている。さんざん人にぶつかっているのに、誰も首のない男の人を不思議に思っていないらしくて、僕はまた少しびっくりした。

「こっちだ、こっち」

頭の部分は何度か体に声を掛けたけど、何せ耳だって頭についてるんだから、きこえっこない。

知らない人に声をかけるのはコワイけど、困っているようだったから首を運んであげた。耳の後ろ辺りを持って運ぶと、やわらかい真っ黒な髪の毛が雪にぬれていて冷たかった。見た目よりずっとずっと重くて、うでが痛くなったけど、なんとかその人に首を渡せた。

その人は、フードをかぶるように、首を体に載せた。一二度首をひねって、ちゃんとくっついているのがわかると、「ありがとう」って優しい声でいってくれた。色が白くてとてもきれいな人だった。

でも首を落としちゃうなんてマヌケな人だ。ほっぺたに泥がついているって教えてあげたら、手の甲で拭って、恥ずかしそうにしてた。お礼にって真っ黒なコートからあめ玉をひとつ出してくれたんだけど、それが僕の一番すきな、アンパソマンキャンディのぶどう味で、僕はすっかりうれしくなった。

こんなにすごいことがあったのに、まわりの人たちは誰も気づいていない。歩きだしながら、僕はなんだか楽しくなって笑った。振り返ったらその人も笑っていて、ますます楽しい気分になった。笑い声はぶどうのにおいがした。

家に帰ってから、鏡の前で首をひっぱってみたら、簡単にとれた。
大発見だとおもった。
鏡のなかの僕が、僕の腕のなかであめをなめていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9915a/

影ふたつ

2010年11月24日07時36分発行